

ヨハネ 10 章「良い牧者イエス」

10:1 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。 10:2 しかし、門から入る者は、その羊の牧者です。 10:3 門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。 10:4 彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているのので、彼について行きます。 10:5 しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」 10:6 イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった。 10:7 そこで、イエスはまた言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です。 10:8 わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。 10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。 10:10 盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。 10:11 わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。 10:12 牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。 10:13 それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけていないからです。 10:14 わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。 10:15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。 10:16 わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。 10:17 わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。 10:18 だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」 10:19 このみことばを聞いて、ユダヤ人たちの間にまた分裂が起こった。 10:20 彼らのうちの多くの者が言った。「あれは悪霊につかれて気が狂っている。どうしてあなたがたは、あの人の言うことに耳を貸すのか。」 10:21 ほかの者は言った。「これは悪霊につかれた人のことばではない。悪霊がどうして盲人の目をあけることができようか。」 10:22 そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。 10:23 時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。 10:24 それでユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリストなら、はっきりとそう言ってください。」 10:25 イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行うわざが、わたしについて証言しています。 10:26 しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。 10:27 わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。 10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。 10:29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。 10:30 わたしと父とは一つです。」 10:31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。 10:32 イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」 10:33 ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするのではありません。冒瀆のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」 10:34 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った、おまえたちは神々である』と書いてはいないか。 10:35 もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれ

ば、聖書は廃棄されるものではないから、10:36『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が、聖であることを示して世に遣わした者について、『神を冒瀆している』と言うのですか。10:37もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じないでいなさい。10:38しかし、もし行っているなら、たといわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父にすることを、あなたがたが悟り、また知るためです。」10:39そこで、彼らはまたイエスを捕らえようとした。しかし、イエスは彼らの手からのがれられた。10:40そして、イエスはまたヨルダンを渡って、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた所に行かれ、そこに滞在された。10:41多くの人々がイエスのところに来た。彼らは、「ヨハネは何一つしるしを行わなかったけれども、彼がこの方について話したことはみな真実であった」と言った。10:42そして、その地方で多くの人々がイエスを信じた。

導入

イエスはヨハネ9章で、ご自身が世の光であるとはどういう意味かを教えてくださいました。救われた人々の「霊の目」を開くということでした。

暗闇にいる人々に光を与えるという働きには、イエスの教えの光を受け入れない人々への裁きが伴います。その裁きとは、彼らが「霊的盲目」のままにされることです。

しかし、霊的に盲目な人々も光を受けて救われることが可能であることも9章の学びでわかりました。実際に目の見えない人の例は、イエスのもとに来る人にはイエスが「霊の光」を与えてくださることを表しています。

10章で、イエスはご自身が羊を救う「良い牧者」であるとおっしゃいます。ここで、ヨハネの福音書の一区切りが終わります。

9章と10章にはある対比が見られます。9章で、神殿の指導者たちは、神の民をちゃんとお世話しない悪い牧者のようにふるまいます。これとは対照的に、イエスはご自身を「良い牧者」と名乗られます。

旧約聖書には、羊と羊飼いのたとえが数多く登場します。中でも、この個所によく似た内容はエゼキエル34章にあります。ではこの個所を開いて、エゼキエルの語った預言を読んでみましょう。

エゼキエル 34:1-16

34:1 次のような【主】のことばが私にあった。34:2 「人の子よ。イスラエルの牧者たちに向かって預言せよ。預言して、彼ら、牧者たちに言え。神である主はこう仰せられる。ああ。自分を肥やしているイスラエルの牧者たち。牧者は羊を養わなければならないのではないか。34:3 あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。34:4 弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって力ずくと暴力で彼らを支配した。34:5 彼らは牧者がいないので、散らされ、あらゆる野の獣のえじきとなり、散らされてしまった。34:6 わたしの羊はすべての山々やすべての高い丘をさまよひ、わたしの羊は地の全面に散らされた。尋ねる者もなく、捜す者もない。34:7 それゆえ、牧者たちよ、【主】のことばを聞け。34:8 わたしは生きている、——神である主の御告げ——わたしの羊はかすめ奪われ、牧者がいないため、あらゆる野の獣のえじきとなっている。それなのに、わたしの牧者たちは、わたしの羊を捜し求めず、かえって牧者たちは自分自身を養い、わたしの羊を養わない。34:9 それゆえ、牧者たちよ、【主】のことばを聞け。34:10 神である主はこう仰せられる。わたしは牧者たちに立ち向かい、彼らの手からわたしの羊を取り返し、彼らに羊を飼うのをやめさせる。牧者たちは二度と自分自身を養えなくなる。わたしは彼らの口

からわたしの羊を救い出し、彼らのえじきにさせない。 **34:11** まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。 **34:12** 牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中にいて、その群れの世話をするように、わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。 **34:13** わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。 **34:14** わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。 **34:15** わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。——神である主の御告げ—— **34:16** わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものに力づける。わたしは、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは正しいさばきをもって彼らを養う。

34章までは、エゼキエルは神の民への裁きについて語っていました。しかしこの34章で、神は、神に属するまことの羊を救う「良い牧者」を約束してくださいます。

この章にはふたつの約束があります。

ひとつめは、無責任な牧者に対する裁きです。

ふたつめは、国々に散らばって失われた羊への救いです。

神がこのふたつをなさるとき、ご自身の群れを養う牧者をダビデの子孫から与えてくださいます。

これらの旧約聖書の背景を念頭に、ヨハネ 10章の学びを始めましょう。

- ヨハネ 10:1-18

イエスは 1-5 節でたとえ話をなさいます。それを聞いた人々はたとえ話が理解できなかったもので、イエスは 7-18 節でそのたとえ話を解き明かされます。

ではもう一度 1-6 節を読んで、たとえ話の要点を見つけましょう。

10:1 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。 **10:2** しかし、門から入る者は、その羊の牧者です。 **10:3** 門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。 **10:4** 彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。 **10:5** しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」 **10:6** イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった。

イエスは、おもに 3 つの比喩を用いておられます。比喩とは、物事を説明するときに使う表現です。多くの場合、何か共通点のある単語が用いられます。

ひとつめの比喩は「門」です。—7-10 節

扉とする訳もあります。

門や扉が何かは皆さんご存じでしょう。どこかに入る場所です。

私は生駒に住んでいますが、その家には玄関と勝手口があります。私が帰宅したときに、皆さんが窓から私の自宅に入ろうとしているのを見つけたら、妻の作ったおいしいイギリス風ケーキを盗みに来たのだらうと思うでしょう。

ウェンディのケーキを手に入れるのには、正しい方法と間違った方法があります。間違った方法は当然、窓から侵入して盗むことです。

正しい方法は、草抜きパーティに参加して、庭の草抜きを手伝ってくださることです。これは数週間前のことになりますが、水曜日のバイブルスタディの参加者を草抜きパーティに招待しました。手伝ってくださった方全員に、ケーキをお礼にごちそうしました。

救いをいただきにイエスのもとの来るのも同じことです。それには正しい方法と間違った方法があります。

無責任な牧者は、ルールや規則を守るという神への間違った道を人々に示していました。一方イエスは、救いへの正しい道を示すために来られました。

イエスこそ唯一、救いへの正しい道です。

イエスのみが、神に通じる唯一の道です。イエスがたったひとつの門です。他の道はすべて間違った道です。他の方法を探そうとする人々を、イエスは盗人で強盗だとおっしゃいました。

10 節は、イエスが豊かないのちへの扉を開いてくださると語ります。このいのちとは「新しいいのち」です。古い命を改善するのではなく、「新しいいのち」なのです。それは神が与えてくださる命です。この地上のものではない超自然的ないのちです。つまり、死んでから始まる永遠のいのちの序章と言えるでしょう。この新しいいのちは、私たちがイエスを信じる時に神が与えてくださり、未来の救いを保証するものであると、パウロはエペソ 1 : 13-14 で語ります。

エペソ 1:13-14

1:13 この方であってあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。 1:14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

規則に縛られる人生ではなく、「絆」で結ばれた人生です。イエスをとおして神と直接つながることです。これが豊かないのちです。

日本にはあらゆる宗教や信仰があります。それぞれがいろんなことを約束しますが、イエス・キリストをとおして神とともに生きる豊かないのちを与えてくれるものはありません。

それらは無責任な牧者だからです。イエスだけが、「本物の牧者」です。

イエスは、無理やり私たちをご自身のもとに引っ張っては行かれませぬ。優しく御許に招いてくださいます。

けれども、必ず門を通らなければなりません。イエスが通らなければならない門です。

黙示録 3 : 20 で、イエスはおっしゃいました。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」

イエスはあなたの心の戸を叩いておられるのではありませんか。今日心の扉を開いて、イエスをお迎えしませんか。

ふたつめの比喩は、良い牧者と雇われた人です。—11-13 節

当時のイスラエルでは、羊飼いは非常に重労働で危険の伴う職業でした。

羊に人生をささげる覚悟が必要でした。羊を守るために、羊と一緒に寝起きします。孤独で重労働で、危険な目に遭うこともありました。

ほとんどの羊飼いは自分で羊を所有しているか、家業の手伝いでしたが、家族以外の人も羊飼いで雇われることもありましたが、彼らは賃金をもらって羊の世話をしました。当然、羊の所有者のような思い入れはありません。

イエスは、オオカミに襲われるなどといった緊急事態になると、雇われの羊飼いは自分を守ろうとして逃げ出すとおっしゃいます。羊のことを心から気にかけていないからです。

羊飼いを大きく分けるポイントは、「羊に対する献身」です。

イエスは、本当の羊飼いは決して自分の羊を置き去りにしないとおっしゃいます。

イエスがここで言うおられるのはこういうことです。「偽り」の牧者は私たちのたましいのことを心から気にかけてはいません。自分のことだけを考えています。一方、イエスは正反対です。イエスは良い牧者ですから、羊のためにご自身のいのちを喜んでささげてくださいます。

イエスの働きが本物であるという決定的な証拠は、イエスがご自身の羊を決して見捨てないことです。

イエスはみことばの中で、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」とおっしゃいました。(ヘブル 13:5、申命記 31:6)

人に裏切られてがっかりしたり、宗教に失望させられたりすることはあります。しかし、イエスがあなたを失望させることは決してありません。

クリスチャンにとっては、これが大きな励みです。クリスチャンではまだない人たちにとっても励みとなるでしょう。

あなたがまだクリスチャンでないなら、きっと今までにいろんな人や宗教に失望させられてきたことでしょう。

配偶者や親友など、誰かに失望させられると、失った信頼を取り戻すのは容易なことではありません。また裏切られるのではないかという思いから、誰も信頼できなくなります。

しかし、イエスを信じるなら、このお方があなたを裏切ることは決してありません。はっきり皆さんにそう保証できます。

私もこれまでにたくさんの裏切りを経験しました。残念ながら、その多くはクリスチャンによるものです。けれども、イエスには一度も裏切られたことがないと心から言えます。

この 25 年間、とてもたいへんな状況の中、私たち夫婦や家族の必要を満たしてくださいました。イエスに失望させられたことは一度もありません。今後もそうだという確信が私にはあります。聖書がそう語るからです。私はみことばを信じています。

私の言うことを鵜呑みにしないで、ご自身でイエスを信じてみてください。このお方は本当に良い牧者です。

3 つめの比喩は、良い牧者とその群れです。— 14-18 節(3 節)

この比喩の中でイエスが焦点をあてておられるのは、「つながり」です。イエスは、ご自身の羊と個々につながっておられ、イエスの羊は他の声とイエスの声を聞き分けることができるとおっしゃいます。

この親しい関係性は、イエスと神との間にある親しい交わりと同様だとあります。これは非常に深い絆です。

羊は羊飼いに慣れると、羊飼いの声だけに反応します。たいていの場合、その声についていけば何らかの得があると考えからです。良い牧草地でおいしい牧草を食べさせてくれるとか、野生動物から守ってくれるとか、羊飼いは羊に何らかの益をもたらすために羊を呼びます。

フィリップ・ケラーの著書「牧者は良い牧者に目を向ける」には、著者の牧場を訪ねてきた友人の話があります。友人は、フィリップの声や羊の扱い方、声かけのしかたを観察し、そっくり真似て、羊を牧場の別の場所に移動させようと試みましたが、ずいぶん頑張りましたが、友人がいくら声をかけても羊はただ彼のほうを見るだけです。フィリップの声を真似て同じ言葉をかけても、羊は一向に動こうとしませんでした。

ところが、フィリップが現れると、羊はすぐその声に反応するのです。

同じように私たちもイエスの御声を聞くことができます。また、イエスが語りかけてくださるのは、私たちに益をもたらすためです。

イエスが私たちに最初に語ってくださるのは、イエスとの一対一のつながりを持つことについてです。

私たちが神と直接つながれるように、イエスは自らご自身のいのちを犠牲にしてくださったとおっしゃいます。イエスは十字架上で死に、私たちの罪の罰を負ってくださいました。

この世の創造主が私のためにご自身の命を投げ出してくださいました。私が神と一対一のつながりを持てるためです。これは、なんとも恐れ多いことだと思いませんか。

16 節で、この囲いに属さないほかの羊がおり、その羊もイエスの声に聞き従う、とイエスはおっしゃいます。このとき、イエスはユダヤ人に向かって話しておられました。ほかの羊とはおそらく、異邦人、つまり私たちのことでしょう。(ローマ 1 : 16)

イエスはまず、ユダヤの民のために来られましたが、異邦人のためにも来られました。異邦人が、この囲いに属さないほかの人々です。

17-18 節で、イエスのご自身の死について、あらかじめ定められた計画だとおっしゃいます。イエスは御父とひとつであられたので、御父への従順と愛をもって十字架上の死に進んで従われました。また、ご自身の羊に対して大いなる愛をもってこのことを成し遂げたあかつきには、天の御父のもとに帰ることもご存知でした。

イエスが天に帰られたとき、ご自身の聖霊を送ることが可能になりました。こうして、すべてのクリスチャンはその恩恵に与っています。(ヨハネ 16 : 7)

ユダヤ人の反応 (19-21 節)

19-21 節には、イエスが誰なのか、イエスの言葉について、ユダヤ人の間で意見が分かれたとあります。

イエスが悪霊につかれて狂った人だと思える人もいれば、狂った人や悪霊は盲人の目を開くことなどできないと認めた人もいました。

イエスの公の働きは終盤に差し掛かっていました。このときもなおユダヤ人がイエスに敵意を持っていたことを、ヨハネは強調しました。

ユダヤ人は、自分たちがイエスの羊でないことを証明する。(22-39 節)

22 節は、そのときが冬で、宮きよめの祭の最中だったと語ります。

聖書でユダヤ人のこの祭りが登場するのはここだけです。この祭りは、今も世界中のユダヤ人家庭で祝われています。今では、「ハヌカー」と呼ばれます。

2100年以上前、イスラエルの地はセレウコス朝の支配下にありました。このセレウコス朝は、イスラエルの民にギリシャの習慣を押しつけようとしていました。

神を信じるユダヤ人の小さな部隊は、なんと地上最強と言われた軍を打ち破り、ギリシャ人をこの地から追放しました。エルサレムの神殿を奪還し、神に仕える場として改めて神殿を奉献しました。

神殿の燭台（メノラー）に火を灯そうとした彼らは、ギリシャ人によって汚されていないオリーブ油がたったひとつあるのを見つけました。一日火を灯すのに必要な量とされるひとつぼの油は、奇跡的に8日間燃え続けたと言われます。8日後には、清いとされる状態で新しい油を準備することができました。

この奇跡を記念して告げ知らせるために、ハヌカー祭りが始まりました。祭りのおもな行事は、毎晩燭台に火を灯すことです。初めの夜にはひとつ、次の夜にはふたつ、と8日目の夜まで毎晩一本ずつ灯す数を増やします。

22-23節でイエスが神殿を歩いておられたときに行われていたのが、この祭りです。

24節で、ユダヤ人がイエスを取り囲み、「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたがキリストなら、はっきりとそう言ってください。」と言いました。

イエスはこの問いに対し、公衆の面前で行った奇跡がイエスについて物語っていると、主張されました。

これらの奇跡は、あるメッセージをはっきりと伝えます。イエスが父なる神とひとつであるというメッセージです。イエスご自身もこれを30節、38節で繰り返されます。

ユダヤ人は奇跡に異を唱えたのではありません。むしろ、奇跡は歓迎していました。しかし、奇跡がイエスについて示す内容を受け入れられなかったのです。

31節と39節には、イエスが父なる神と対等であるとご自身についておっしゃると、ユダヤ人はイエスを石打ちにして捕えようとしたとあります。しかし、イエスは神殿の外へと逃れられました。

ユダヤ人の問題は、自分たちの思いどおりのキリストを求めたことです。彼らの習慣や考え方を換えようとするキリストは求めていなかったのです。

イエスはこの状況について、26節で結論を出されます。ユダヤ人たちが信じなかったのは、イエスに属する羊でなかったからです。

27節には、イエスがご自身の羊をご存じで、羊はイエスに従うとあります。

ユダヤ人たちは、イエスに従わなかったことで、自分たちがイエスに属さない羊であることを自ら証明してしまいました。

この章の釈義を終えて適用に進む前に、28-29節を検証する必要があります。

この箇所は、信徒の永遠を保証する非常に重要な箇所です。

信徒を永遠に守られるのは結局のところ神ご自身であると、イエスはユダヤ人におっしゃいました。

私たちを救ってくださるイエスは、全能の神の御力によって私たちをお守りくださるイエスです。この世で壊されることのない唯一のものは、私たちの救いです。私たちがイエスに信仰を置き、

救いのためにイエスが十字架上で成された御業を信じるなら、それは奪われることはありません。
パウロは、ローマ 8 : 38-39 でこのように言いました。

ローマ 8 : 38-39

8:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に
来るものも、力ある者も、 8:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリス
ト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

40-42 節で、イエスはヨルダン川の向こうに戻って行かれます。

40-42 節には地理的な情報が記されています。このことから、ヨハネの福音書における一幕が終わ
ろうとしていることが分かります。

バプテスマのヨハネの話が出たことで、ヨハネ 1 : 7 が思い出されます。

ヨハネ 1:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によ
って信じるためである。

人々がイエスのもとに来ることで、この目的は果たされます。

ここで皆さんにお尋ねします。「あなたはイエスを信じるようになりましたか。」

では、ヨハネがこの福音書を書き宛てた当時の人々にとって、またここ OIC にいる私たちにとっ
てどういう意味があるのでしょうか。

当時の人々にとって—イエスのご自身の民に救いを与える良い牧者です。人々が「偽りの教師」
に縛られていても、イエスは救ってくださいます。

イエスが唯一の良い牧者であり、他の宗教はすべて「偽りの教師」です。イエスは、命をかけて
ご自身の羊を守る覚悟をお持ちでした。

これは当時の人々に大きな安心を与えてくれたでしょう。とくに生まれつき盲目だった男性には
そうです。この人はまだその場にいたようです。

盲目だった男性は、宗教指導者や家族からはないがしろにされましたが、天でイエスとともに過
ごす永遠のいのちをいただきました。豊かないのちを受けたのです。

良い牧者イエスは、ご自身の羊を救うことがおできになるお方です。ご自身の羊の面倒を見て、
永遠の救いを誰にも壊されないよう守ってくださいます。

今日の私たちにとって— 私たちにも同様のことがあてはまります。私たちはユダヤ人でなくて
も、16 節にあるこの囲いに属さない者です。イエスは私たちをも導いてくださいます。私たちは
その御声を聞くでしょう。

そうです。イエスに心を開くなら、イエスの御声を聞くことができるのです。

イエスを認め、その御声に聞き従うなら、イエスは神の御力によって何もかも私たちの世話をし
てくださいます。そしてついには、天国にある永遠の故郷へと連れ帰ってくださいます。